

《履修上の留意事項》 この演習はオンデマンド講義（5回）以外の残り18回を2グループに分け、担当2名の教員が同時開講します。

事前にオンデマンドによる教材視聴後、対面による演習を実施します。また、Google Classroomを利用し、オンライン上からレポート課題の提示・提出を行いますので、パソコンとwi-fi環境を準備して下さい。演習によっては検査機器が限られているため、待ち時間が発生する場合があります。その場合、自身の順番が来るまで提示された課題に取り組むこと。過去に提示された課題に取り組まず、他教科の課題を行う学生が散見された。そのような行為が確認された場合、該当学生のこの科目の受講を以降一切認めず失格処分とするので注意すること。

《担当者名》 前田秀彦 maehide@hoku-iryo-u.ac.jp 葛西聡子

【概要】

聴覚障害の診断に必要な基本的検査に関する理解と機器操作を習得する。

【学修目標】

「一般目標」

1. 聴覚障害の診断・治療に必要な検査法、評価法について理解する。

「行動目標」

1. 標準純音聴力検査を実施できる。
2. 語音聴力検査を実施できる。
3. 中耳・内耳機能検査を実施できる。
4. 他覚的聴力検査を実施できる。
5. 聴力検査の留意点を具体的に説明できる。
6. 複数の聴覚検査法の関連性を理解し、検査所見を述べることができる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	標準純音聴力検査1 (オンデマンド1)	標準純音聴力検査手技説明 オーディオメータの確認 気導・骨導聴力閾値の測定 マスキング負荷	前田秀彦 葛西聡子
2) 3	標準純音聴力検査2,3	演習グループ確認と演習の進め方の確認 気導聴力閾値の測定	前田秀彦 葛西聡子
4	標準純音聴力検査4 (オンデマンド2)	遮蔽(マスキング)について机上課題を行い、その理論について学ぶ。	前田秀彦 葛西聡子
5) 6	標準純音聴力検査5,6	気導聴力閾値の測定 遮蔽(マスキング)について演習課題を行い、その理論について学ぶ。	前田秀彦 葛西聡子
7) 8	標準純音聴力検査7,8	気導・骨導閾値の測定(マスキング負荷あり)	前田秀彦 葛西聡子
9) 10	標準純音聴力検査9,10	気導・骨導閾値の測定(マスキング負荷あり)	前田秀彦 葛西聡子
11	語音聴力検査1 (オンデマンド3)	語音聴力検査の理論と検査手技について動画を視聴し理解する。視聴後、課題で知識の確認を行う。	前田秀彦 葛西聡子
13)	語音聴力検査2,3	語音了解閾値の測定 最高語音明瞭度の測定	前田秀彦 葛西聡子

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
14			
15) 16	語音聴力検査4,5	語音了解閾値の測定 最高語音明瞭度の測定	前田秀彦 葛西聡子
17	中耳・内耳機能検査 1 (オンデマンド4,5)	ティンパノグラム、耳小骨筋反射検査、DPOAE 検査、SISI 検査、自記オージオの理論と検査手技について動画を視聴し確認する。動画視聴後、課題にて知識の確認をする。	前田秀彦 葛西聡子
18) 19	中耳・内耳機能検査4,5 ティンパノグラム 耳小骨筋反射 DPOAE	ティンパノグラム、耳小骨筋反射検査の実施 DPOAE 検査の実施 自記オージオグラム、SISI 検査の実施	前田秀彦 葛西聡子
20) 21	中耳・内耳機能検査6,7 SISI 自記オージオメトリー	ティンパノグラム、耳小骨筋反射検査の実施 DPOAE 検査の実施 自記オージオグラム、SISI 検査の実施	前田秀彦 葛西聡子
22) 23	まとめ	1症例について標準純音聴力検査(気導・骨導)、 語音弁別検査を一連で行い、純音聴力検査のオージオグラムと語音聴力検査のスピーチオージオグラムを作成する。	前田秀彦 葛西聡子

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部(研究科)、学校の授業実施方針による

【評価方法】

各回のレポートによる評価(100%)とする。

【教科書】

中村公枝 他 編 「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版」 医学書院 2021年
日本聴覚医学会 編 「聴覚検査の実際 改訂4版」 南山堂 2017年

【参考書】

青木直史 著 「ゼロからはじめる音響学」 講談社 2014
小川郁 編集 「よくわかる聴覚障害 難聴と耳鳴りのすべて」 永井書店 2010年

【備考】

演習内容によって使用する教室が変わります。
グループによる演習が中心です。勝手な行動は慎むこと。

【学修の準備】

- ・教科書を精読し、検査方法および留意点を事前に予習しておくこと。(予習80分)
- ・演習課題の内容、専門用語の意味等を理解して演習に臨むこと。
- ・分からない部分は、教科書・参考書などを参照したり、オフィスアワーを利用し担当教員に確認すること。(復習80分)

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

(DP3) 言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

前田秀彦(臨床検査技師、言語聴覚士)
葛西聡子(言語聴覚士)

【実務経験を活かした教育内容】

聴覚障害の評価・検査法、リハビリテーション、聴覚補償についての理論や知識、技術を身に付けることが出来るよう、机上ではない豊富な臨床経験に基づいた講義を展開する。